

會



報

1962年10月

223

日本山岳会

各方面から集って来て下さった支部長の皆さんの話をきいていたら、何か会長としても一言挨拶をのべろということになった。

歓迎の意味をもって、一言無かるべからざるどころだが、特に何という準備もしていなかったの、ふだん考えていることの二三を思いつくまゝに述べて、その場の責任を果たしたのであった。

ぼくは四月の総会の時には日本にいなかった。だからもしその席にいたならば、当然しなければならなかったであろう、新任会長としての挨拶をしていない。しないですむのは当人としては大いに助かる話だが、何にもいわないのもどうかとも思わぬではない。

かといって、別にあらたまって何をいいたいということもない。日本山岳会の会員ならば、誰

も彼も知っているであろうことを繰返すのがおちなのである。

七月の支部長会の席でも、そんなわけで、その時頭に浮んだことの幾つかを述べたわけのことだが、自分のメモのつもりで大要を記しておく。そして会員の諸兄にも読んでおいていただくと思うのである。

第一は、日本山岳会はその名の如く日本のアルパイン・クラブである。クラブであるからには、クラブのメンバーが各々よく知りあって親しみあい、そして場合によっては助け合いもして、気持のよい空気を作っていかねければなら

まいと思う。この点は職業団体や利益団体や技術家の集りと大いに違うところだ。

会員の年齢から見れば、大長老から若い青年層まで、随分のひろきがあることは事実だが、そうした開きにもかゝらず、誰も彼もが、親しい関係で結びついて、楽しいクラブを作ること何よりも大切なことだろう。

だから是非、日本山岳会を楽しいクラブにしたいというのが、ぼくの第一の願いだ。

第二に、日本山岳会が日本を代表する山岳団体であるということだ。別段代表せねばならぬというのでもなし、代表したいというわ

ともに考えてみたいこと

松方三郎

けでもないが、日本山岳会が、日本の山岳界を代表しなければならぬという立場に立たされることは、事実として、過去にもあった、現在もあり、そして将来もあるのである。

会の歴史や、会の内容をこうした立場におくのであって、会としても、この責任を回避することとは許されない。だから日本山岳会はこうした面でも当然ある義務を負う覚悟をもたねばならない。

国際的に見た場合、日本山岳会の地位は一層はつきりとすると思う。このことは、英国における登山協会（ブリティッシュ・マウンテン・アソシエーション）

と英国山岳会（アルパイン・クラブ）との関係をみれば明かである。

われわれの会はクラブだといくら考えていても、こうした面では社会に対して、公的な責任を負わねばならないこともあるわけだ。そしてこれが会の仕事として少ない割合を占めることもありうるのだ。

日本山岳協会ができて、日本山岳会はその構成の中に加っているのだから、大分事情は変わったことは事実だが、それでもなお、責任を全面的に解除されたわけではない。

ところで第三に是非取上げて考えてみたいと思うことは、もう少し広い意味での対社会的な活動である。

技術指導も大いに結構だが、まだ技術以前の問題として取上げねばならないことが少なくないと思うからなのだ。例えば、自然保護の問題について、われわれは大いになすべきことがあるのではないであろうか。

国土美化という言葉は、言葉そのものが美化しすぎている、現実から遊離している感があるが、当面、空缶を山において来るなど、山の頂上をよごすなどか、いくらでも天下に訴えなければならぬ問題はあつた。

世の中が狂っている時代に、われわれとしても黙っているばかりではないか、と思うことは多いのである。

ドライブ・ウェイを造って、その結果、人間の歩く道は姿を消してしまったところも多い。

山をみればケープルをつけないれば気がすまないという危険な人物も、あい変らず天下に満ちているのだ。

そんなことはわかりすぎていると思っていると、案外少しもわかっていない。いうこともなからうと黙っていると、とんでもないことになっている、といった事実は、われわれの目の前に余りに多いのである。

ヒマラヤ遠征大いに賛成だが、自分の国の山を目茶苦茶にしておいて何のヒマラヤだということなのだ。

われわれは日本人だし、われわれの会は日本の山岳会なのだから、何としても、この日本の山をちゃんとした山にしておかなければならぬ。

日本山岳会の土台は、やはり、こうしたことに対する明確な考え方の上に、しっかりと根をおいていなければならぬと思うのである。

大した準備もなしにしゃべったことだから、意を尽さぬ点はいくつ、もしこれを閣僚の施政演説と同じにみれば、すきだらけなものだということになるうが、そんなつもりで述べたものでもない。しかし現に当時支部長諸兄の前に開陳した意見なのだから、それをそのままこゝに載せてもよいと考えたのである。

柳田国男先生の思出

辻村太郎

法学士柳田国男の名を、私をはじめて注意したのは、たしか明治三十年代の末で、中学世界でよんだ紀行文が、非常に面白かったからであろう。美濃の付知あたりから飛騨に入り、白川の村を見て、越中平野に出る旅であるが、猿の皮が干してあるとか、雲水の僧ほど自由でなくとも、せめて葉売ぐらい気楽に、日程を定めない旅がしたいという感想、立山から流れて富山湾にそそぐ、早月川の白い河床が、源の方まで高く見えるなどの記事が、飛びとびだが今も記憶に残る。

旅日記は親不知の海岸の手前で終り、そこに「歌にきく杜はいづこ宮崎のみさきのおちはたゞ青き海」の文字が記される。

それから間もなく山岳会の大会で、「山民の生活」と題した講演があり、こんどは文章以上に、柳田さんの話のうまさや内容の豊かなのに、私はすっかり傾倒してしまった。この速記は「山岳」（四年三号、九六頁）に載っている

し、その時の光景は小島鳥水氏の妙筆で、「聴衆の一人は感激のあまり握手を求めたる程なり」、「（山岳）四年二号」などと記されている。私は八田代Vの地名に関する話から強い印象を受けた。

この名称は相模川の支流中津川や大井川の上流などにあり、神河内（上高地）の田代池もその一つであるという。山奥の村の水田予定地は、食料よりも先ず第一に、神酒を造るために必要であったというのが、柳田さん独特の見解である。講演の時には登山家諸君も、人間の生活に興味を持ってもらい度いという前置きがあり、山頂に立てば大い天風芒々、白雲漠々にきまっているといった諸説もあったが、記事ではそこだけきれいに削られていたのは、さすがに洗練された人柄がしのばれる。

その頃から私はぼつぼつ柳田さんの著書に親しむことになるのだが、これも最初は「山岳」の小島鳥水氏による紹介が媒になったのである。「遠野物語」は今でも懐

しい小冊子で、三百部かの限定版であった。北上高原の山間にある町の説話を集めたものであるが、小島さんも書いているように、所どころに著者の註釈があつて、「メーテルリンクの侵入者を想はしむ」などと、欄外に六号活字で記されているのである。この本を見た青年時代から半世紀もたって、国立公園になる陸中海岸をめぐる歩いての帰り道、釜石からの車が故障を起して、谷の中で日が暮れてしまい、笛吹峠を下ろうとすると、むかし草双紙で見た黒姫山（黒山）の画のような、凄みのある半月が黒雲の間に光っていた。

大正二年ごろから新渡戸稲造博士邸で月々ひらかれた郷土会に、地質の学生であった私も出席することになり、山岳会員では新渡戸先生の高弟で、従兄辻村伊助の親友である那須浩氏の顔が見え、やがて日高信六郎氏も加わった。

この会の中心は柳田さんで、貴族員書記官長の忙しい身体であった。山や島に関係のある話では、農学部教授であった植物学者草野俊助氏の中硫黄島と屋久島の旅行談などがあつた。妙な着物をきた人間が砂浜でおどって居たという、南洋から漂流して来たとと思われる人々の昔ばなしを語った、柳

チャールズ・ハウストン
インドに赴任

吉沢一郎

ハウストン一家が日本に遊びに来てからもう一年になる。本當に月日の経つのは早いものだ。そういえば私が南米から北米經由で雨の羽田にドスンと着陸したのが去年の十月二日、全く何んにもしないうちに一年以上が経ってしまった。

ところでこの十月の一日に事務所から家に戻ったら懐しいチャールズから久振りに手紙が来ていた。

山岳会の皆さんによろしくというようなことと、インドに赴任の事情が書いてあったので、一々連絡する代りにその全文をご披露しておくことにする。

× ×
一九六二年九月二十四日
アスペン（コロラド）にて
チャリー

吉沢一郎様

パークレーのF.P.ファークハール氏から転送してきた美しい写真と地図、有難く頂戴しました。早速お礼の返事を出すべきであったのですが、丁度その頃、私の人

生に思いがけない変化が起ってしまったのです。

私は明日（九月二十五日）、二年半の予定でインドへ出発します。ニュー・デリーの平和部隊に編入され、インド全域の同計画の運営に当ります。

これは仕事そのものの興味もさることながら、私の家族にとっても新しい世界を見、その中の小さな部分になる、またとない機会だと思ひます。

私の妻と子供達は、私が適当な家を見つけてから十二月にはそこに来ます。私がここに来る決心をしたのはどっちかといえば突然のことと、それからというものの、いずれはまたアスペンに戻ってくるとはしても、長い間留守にするための色々の整理に忙殺されていました。

日本に行つたのはこの間のように思いますが、あの時のことはいまだかつてなかった素晴らしい思い出として残っています。そこで得た沢山のお友達のこととも忘れられません。

私がインド滞在中にも山岳会からは遠征隊がヒマラヤに来るでしょうから、私は多分、皆さんの中の誰方かにニュー・デリーでお会いする機会があることと思ひます。こんなわけで、私がニュー・デ

田さんの声や顔の表情まではっきり覚えていたが、あんなに面白い会は後にも先にも無かったように思う。

そのうち柳田さんは一度ちょっと閑地について、長い間の望みであった、九州から奄美大島をへて沖縄へ、さらに宮古島から石垣島までの旅行をされ、朝日新聞に「海南小記」を連載した。伊良湖崎で椰子の実を拾い、島崎藤村に詩材を提供した人が、六十年後になって最後の著書「海上の道」(昭和三十六年七月・筑摩書房)を出すまでの間に、最も重要な資料を与えたのは、この羨むべき島々の旅である。それはダーウィンのビーグル号航海に似た役割をしたと云えるであろう。

私は後になって十五年ほどの間に、屋久島や奄美大島と喜界島に渡り、沖縄には三度も行って、宮古島から先の石垣島と西表島は台湾航路で寄港しただけであるが、柳田さんの持論である南方文化伝来説には、何となく共鳴を感じている。琉球列島が北の方からの一方交通であったことは、如何にしても考えられないのである。ただ何分にも私の不勉強から、カリフォルニア大学の地理学者サウアーのように思いついた議論が出来るのは残念である。

ジュネーヴにおける一、二年の

役人生活を最後に、柳田さんは成城学園の新邸に移って、そこに民族学研究所を置いて、悠々とした学究生活を楽しむことになった。それが四十年も続いたのだから、全く目出度い限りである。そこには色々な草木を植えて、四季おりおりの眺めを楽しみ、野鳥の会の一員ともなっていて、鳥の生活を観察したりして、およそ我われが理想とする暮し方が実現されたのである。

朝日新聞社の主催で、河口湖畔に夏期大学の講習会があったのは、大正十三年の夏である。家族づれでその宿に数日を送った私は、令息令嬢と御一緒に柳田先生に久し振りで御目にかかり、鉄道馬車で鳴沢の村まで御供して、静かな午後富士山を真近に眺めた。

去年の十月半ばすぎ、有料道路と文化財の関係で、御庭まで登り、カラマツやナナカマドの美しい黄葉紅葉を賞したが、そこから笠雲の下に赤い火山礫をあらわした山腹を仰いで、四十年の昔を思い出したことがあった。

成城の御宅を訪問したのは二十五年ぐらい前で、オーストリアの

若い地理学者を案内して行った時である。

三十畳もある広い洋間は、驚くべき沢山の書物で満たされ、学生時代から薄暗い学校の図書室を巣にして暮した私などの目には、まるで天上の楽園のように思われた。この中から「雪国の春」や、「秋風帖」、「豆の葉と太陽」など、山好きな人々を引きつけるような数かずの本が産まれ、文化勲章にあたいする仕事が成し遂げられたのである。

ひろびろとした二階の客間には、令弟松岡映丘氏の画が懸けてあった。大和絵風に描いた遠山の藍と前景になった赤松の幹の色が美しかった。

定本・柳田国男集の一つ、第二十巻「地名の研究」の巻頭には、東条操氏と並んで、自宅で撮られた最近の写真(昭和37年4月)があつて、喜寿と米寿の学者が、実に立派で柔和な姿を見せている。新聞人も書いていたが、ああいう清らかな年寄りの形に、私たちも出来るものならな度いと思う。

しかし持ち前の厳しい顔つきは致し方ないとして、大きな事業をなし終えた、あの満足そうな笑顔などは、まづ以てあきらめた方が宜さそうである。

リーで皆さんのおいでを心から待っているということを、日本山岳会の皆さんにお伝え下さい。どんなにかお会いできるのは私はこの上ない光栄と思いますが、特にあなたには再び会いたいと思っています。

また、手紙を出しあいましゅう。そして出来ればインドで会いたいですね。妻も娘も私とともにあなたの、そしてご家族のご幸福を祈っております。(以上)

インド隊によるヒマラヤ登山年表訂正、追補

会報二一七号に「インドに於ける最近のヒマラヤイズム」と題して標記年表を紹介したが、その後在ダージリンのヒマラヤ登山学校からの Season's Greetings によれば、Eight years of Indian Mountaineering と題して十七座の登頂をあげているのでこれを参考として追加、訂正をしておく。

△訂正▽

●一九五三年五月六日のパンチチユリ登頂月日を五月二七日と訂正

△登頂月日追加▽

●アビガミン登頂月日、一九五三年六月十七日
●カメット登頂月日、一九五五年

七月六日。

●セーカン・ピークの登頂月日、一九五六年七月二五日。

●ナンダグンチー登頂月日、一九六〇年一〇月二二日

●一九六一年の登頂記録追加▽
一九六一年六月一日、Davis-I 二二、〇〇〇呎(六、七〇五 m) 登頂

●一九六一年六月二二日、Maithe-I 二二、三〇〇呎(六、八〇三 m) 登頂

●一九六一年一〇月二〇日、Nanda Khat 二一、六九〇呎(六、六一一 m) 登頂

●一九六一年一〇月二二日、Kanchengrao 二二、七〇〇呎(六、九一六 m) 登頂

(松田雄一) 以上

本号	目次
一	ともに考えてみたいこと
二	●柳田国男先生の思い出
三	●チャールズハウストン、インドに赴任
四	●インド隊によるヒマラヤ登山年表の訂正・追補
五	●地図と地名、尾瀬附近
六	●早大ベルアンデス通信
七	●カトマンズ通信
八	●成瀬先生「山春生徒」
九	●(山崎先生を偲ぶ)
一〇	●黎明期の二高山岳会
一一	●北海道の冬
一二	●冬の山を夏山のつもりで
一三	●図書紹介
一四	●会員通信
一五	●会務報告
一六	●東京支部・大分支部報告
一七	●ヒマラヤ登山隊に望むもの
一八	●ネパール政府登山規則の一部改正



カフト・茨木藩之吉

地図と地名について
—尾瀬附近—
西村 蹊 二

先般、本会報三二二号の「尾瀬の地図と地名」と題した武田久吉先生のお話の中に、最近国土地理院から発行された「尾瀬附近」五万分一集成図に対する手きびしいご批判がありました。これにつ

きまして編集の方から何んらかの回答を寄せられるようにとの要望がございましたので、地図と地名についての誤解を避け、更に一層のご理解を載くために、ここに気のついた二三の問題を取り上げて回答に変えさせて載きます。本来なら国土地理院における作業担当機関であります測図部から正式に回答すべきところですが、今回はそれを止めて私個人の考えを書くことにしました。正式な回答は地図と地名についての知識を楽しみながら広めようとする趣旨にそわないと考えたからです。

今回の武田先生の手きびしい批判の声を聞き、何事も同じことが言えそうだが、地図作成事業とは全くむずかしいものだと思わざるを得ない。

元来地図の利用目的というものが、かなり広いものであることはわかってはいるが、どんな目的にも合致するような地図を作れと言われても、そう簡単にできるものではない。我々は日夜利用者の方々からの質問攻めに会っているが、そうかといっているうちにその都度回答したり、地図の内容をかえるわけにはいかない。だからいつも難問題をかかえ、それが未解決のまま仕事を進めざるを得ない現状である。

武田先生の話を中心にしてその問題点をここに挙げてみる。

国土地理院で発行する五万分一

地形図作成事業には、あらゆる地図の基礎になる内容をもたせること、目的は多目的であること、全国を統一した図式で表現すること等の大原則がある。その結果、1、利用者の範囲が多く、要求もいろいろだが、矛盾点も多いので利用者全体に使いやすい地図ができない。2、日本全国を統一する必要がある。特定の地域には不適当な記号も使わなければならない、等の不都合が生ずる。

例えば、地図を使用して各種事業や登山等の計画をする人には地図上に計画線やルート等を書き込むのに都合のよい一色刷がよく、ドライブや散歩用には美しい多色刷の方がわかりやすい。山岳地帯では登山に便利な小屋の名称、水場、コースの難易等のわかるような特別な記号がほしいなど、書き上げればきりが無い。

これらの要求を知ってか知らずか、依然として同様の地図を発行していることが、融通のきかない「役所仕事」といわれる所以であるが、融通のきかないのは、主として先に示した大原則があるためであらう。(もっとも融通がききすぎると、民間事業の圧迫になるとまたしかられるが、——)

が多いからといって、その特定の利用者のために、地図の内容を変えることは適当でないということでは勿論だが、少し融通をきかせたのが、いま問題の「尾瀬附近集成図」である。この地図作成の動機は二つある。

すなわち地図の売れ行きを見ると、大都会周辺の山岳地帯や観光地が最も多く、しかもその時期が4・7月が最も多いこと、五万分一地図は一図葉が25×35センチの大きさのきりのよい経緯度数で切られているので、場所によっては地図の枚数が必要以上に多くなり不便であることの二つである。

一の実実は登山用として最も多く利用されていることを示している。したがってこの目的に合致する八ヶ岳、槍穂高などは今後この集成図の作られる可能性がある。しかしこの集成図は先に述べた二つの動機によるものであるから、既発行図を継合させただけで内容を変えないことが原則であった。今回おしかりを受けたのは、どうやら融通をきかせて、細かい名称や、施設等を入れたためのものである。(出版するからには、そんなことは言っていられないのだ——)

記入することのむづかしさについて次に述べてみよう。

国土地理院における各種の名称の調査は、各市町村役場において作成された各市町村管内全域にわたって調査した地名調査によることを原則としている。

この方法は、「役場で尋ねた」と、本当のことがわかるとは、限るものではない。——と言う武田先生のご意見と衝突することになる。それでは一体他にいい方法があるのだろうか? 「現地に駆けばわかる」、人間の住んでいない所では「釣師がよい」そうだが、たしかにぐもったものである。

しかし現地に行っただけでは釣師にも会えぬ、やはり現地に住むことが必要だろう。

地名についての問題はまだまだある。かつての原野が急激に開拓されて一大ダムになる昨今である。釣師の釣った釣場は今がダムの下かも知れない。大都市周辺の新開地では市役所は次々と行政名を作り出してゆく。かつての地名は味気ない「一区」、「二区」などの名称に変わってしまう。こうした所では市役所は新名称を、心ある古老等は旧名称を地図に記入すべきだ要求する。そして住民に聞いてはつきりしない。

住民はどちらの名称を多く用い

るか、調査したらどうか？などといわれても、いちいち調査できるものではない。なんとすれば最近では「航空写真測量」によって地図を作成しているから、現地調査も地図一枚につき一ヶ月程度、そのうち地名調査は七日位しかおこなわないからである。

だからといって大蔵省が地名の調査費を簡単に増額してくれるとは限らない。この点はおつての陸軍参謀本部時代の方がよほどよかったように思われる。

尾瀬ヶ原の「見晴」については、問題はさらに複雑である。

それには、こんないきさつがある。かつて昭和二十七年応急修正版の地図を見ると、この地点には地名は記入されていないで、「弥四郎小屋」と「檜枝岐小屋」の二つの小屋名だけが記入されていた。

ところが昭和三十三年の調査時には、この附近には更に数軒の小屋が増設されていた。一般的に考えればこれらの小屋の名称を全部記入すればよいわけだが、そんなことをしたら、この附近は小屋の名称でうづまり、附近の道路や地形の關係を表現するのに著しく支障を来たし、別の点で地図の価値を失うことになる。

しかし何軒かの小屋の中から二軒だけを取上げて地図に記入することは、小屋の宣伝という点で適当でないで、小屋の責任者に集つてもらつてその旨を伝えたとこ

ろ、結果は「見晴」という地名だけを記入することに意見の一致を見た。

この附近の地名は何か、と聞いたら、「丈堀」だというのが、その地名を特にすすめたが、どうしたのかそれに応じなかった。この結果については、檜枝岐村役場で承認され、地図に記入される結果になった。

武田先生にでも立会っていただけば、正しい地名が地図に記入できたのだが、これは地図には必ずしも正しい地名が記入されるとは限らないという一例である。

「丈堀」に行くにはどの道を行けばよいか」と聞いても、「そんな所はない」と言われたのでは、地図としての価値は零である。

このことを考えると、正しい地名を地図に入れるためには、先ず地元人が正しい地名を呼ぶようにならなければならない、ということがわかる。

「大反沢」が「大横沢」に、「這橋沢」が「平弦沢」になったのも、地名調査のいたずらというところらしい。(国土地理院に日本語を知らぬ人がいるかどうかは、ご

想像におまかせする。)

× ×

地図に地名を記入することのむずかしさは、以上に述べたとおりだが、武田先生のご指摘の内容を吟味すると、確かに誤りのあることは事実である。勿論中には再検討を必要とするところもあるが、特に、「広沢田代」の落ちと、「熊沢田代」「広沢田代」の注記が逆になっていること、小至仏山の位置を誤認したことなどは明らかな誤りである。

これは「御山田代」を「御山沢田代」と聞き違えたと同様の誤りらしい。

これらの誤りは、次の出版の際に修正することは勿論だが、さらにご指摘事項の大部分の他、見晴の注記には「丈堀」と「十字路」を併記し、山の鼻小屋の隣りに「尾瀬ロッヂ」「至仏山荘」、荷鞍山の北にある独標二〇〇六Mの山に「白尾山」、沼尻小屋の隣りに「沼尻休憩所」、ススケ峰に「スズガ峰」、三平峠の南の「一之瀬休憩所」等の名称を新たに記入する予定である。

また大清水から中岐沢、鬼怒沼への普通登山道、湯元から白根山への登山道、丸沼温泉から根名草沢への乗越ルート等は新たに修正加刷されることになろう。

× ×

以上大分弁解がましいことを書き並べたようであるが、これらの誤りを生じた原因を考えてみると①地図利用者の読図能力の程度がわからないこと。②予算が少ないこと。③地名に関する宣伝が不足していること。④国土地理院内に地名研究の組織がないこと、などがあげられる。

これらのことを考慮して、各階層の地図利用者からなる地図研究グループを作り、利用者の読図能力の程度、地図にもり込む内容、利用者の利用方法等について研究し、少しでも利用者には有益かつ正確な地形図を作成してゆきたい。

日本山岳会が大正五年ごろ働きかけたと同様に、今回もこの趣旨に賛同、協力下されば幸甚に存じます。

またこれらの動機を与えられた武田先生に重ねて謝意を表するとともに、ここに述べたことがらに對して、さらにご意見をお寄せになることを期待します。

(筆者は国土地理院測図部勤務)
(三七、一〇、一五)

早大ペルー・アンデス 遠征隊あいさつ

謹啓稲門山岳会の南米遠征委員会が派遣致しましたペルー・アンデス遠征隊は、みなさまの絶大なる御支援を得て五月二十七日出発致しましたが、コルディエラ・ブランカ山群での登攀を終え、この程、全員無事下山致しました。この間、吉川尚郎隊長以下五名の隊員は、世界で最も美しい峰々といわれるネバド・アルパマヨ(六二二〇米)に全員登頂したのを始め、ネバド・チュルップ(五四九三米)、ミルアコーチャ(五四八〇米)、ウアマンリバ(五二〇〇米)の三つの山の初登頂に成功致しました。これもひとえに本遠征隊に對し終始暖かい御援助と御助言を寄せられた皆様の御好意の賜と信じ、こゝに厚く御礼申し上げます。

なお、遠征隊は十月初旬リマを出発し十一月初旬に帰国する予定でございます。詳細につきましては帰国後正式に御報告申上げる予定でございますが、とりあえず行動の概要と登山日程の無事終了をお知らせし、御礼に代えたく存じます。

昭和三十七年九月

稲門山岳会

ペルー・アンデス遠征委員会

委員長 村木潤次郎

年次晩餐会お知らせ
○とき 11月28日(水)6時
○ところ 茗茶会館(大塚窪町)
○会費 一〇〇〇円
○「この一本展」、会員有志自慢の秘蔵書を持寄り展示します

ペルー・アンデス通信

早大遠征隊

ネバド・チュルプ峰初登頂

コルディエラ・ブランカ山群の
数少い未登の山の一つであるネバ
ド・チュルプ峰(五、四九三m)の
初登頂に成功しました。劔岳のよ
うな格好をした非常に手強い山で
高度はたいしたことありません
が、ウアラスより二日間のキャ
パンをすすめ、四、三〇〇mにB
・C、四、六〇〇mにC・Iを建
設しましたが尾根よりの登頂に失
敗。七月十八日頂上より落ちる七
〇〇mの岩壁を攀り、吉川隊長、
井口隊員は初の日章旗をあげまし
た。私と他のものは、翌十九日チ
ュルプの西方にある氷雪の五、二
〇〇mの無名峰(腹の薬という薬
草がたくさんあるので、ネバド・
ウアーマンリパと命名)の初登頂
に成功しました。会の皆様に宜し
くお伝え下さい。

(七月二十六日付、ウアラスに
て、鍋木昇・松田宛)

ネバド・アルパマヨ登頂

はるか日本から離れたペルーの
コルディエラ・ブランカの麓から
残暑お見舞申上げます。

ネバド・チュルプに登頂の後、
いったんウアラスに戻り休養した
後、主目標のネバド・アルパマヨ
(六、一二〇m)に向い、八月十
三日ドイツ隊について第二登、全
員が登頂。ついでコルディエラ・
ブランカの最北端に残されている
唯一の処女峰ネバド・ミルアコー
チャ(五、四八〇m)に八月二十
一日、二十二日の両日、二隊に分
かれて再度全員登頂して全山行を
終了いたしました。

八月十三日、ドイツ隊に次いで
第二登に成功したアルパマヨは、
コルディエラ・ブランカの北端ア
マゾン側、奥深い所にあり、三日
間のキャパンの道は峻しく、ま
たアルパマヨ氷河はアンデス特有
の懸垂氷河で平坦な所が少く、大
きな城砦の様なセラックス、そし
て家が軒入りするようなクレバス、
荒れ放題な氷河は迷路の様です。
氷雪のピラミッド型をしたアルパ
マヨは世界で最も美しい氷雪の山
と云われ、又最も困難な山でし
ょう。この登攀に要したザイルは約
八百米、アイスハーケン十五本、
(好日山荘のゴ字型が青氷に一番
良いです)フィックスド・バー三十
五本、平均斜度六〇〜七〇度の急
な雪壁のルート工作は、一番の☆

石井 鶴三



カトマンズ通信

神原 達

拝啓 その後益々御健勝に日本
の山々を歩かれていられますこと
と拝察致します。

私共六月上旬にカトマンズ市内
の比較的広いコンパウンドの中に
あります小さい家に引越しまして
毎日少しづつ生活を固めつつあり
ましたが、やっとこのところ落付
いた毎日を送れる様になりました。
庭には日本から持参した、野菜
花をガードナーに任せ、(月五
〇ネパール・ルピーです)日本製の
圧力式の水のロカ器を台所にて使
い、石油ストーブ等全て今回持参
したものでカトマンズにて小さ
ながらも日本人の集会所ともいえ
る場所を築くことが出来ました。

今日もスイスの Technical Aid
Mission と国際赤十字の婦人達六
名を妻が招待し、お茶を一緒にし
ました。今までのチャットラパテ
ィーの葉屋さんの所ではできな
かったことなどもここでは充分に
でき、又違った意味でネパールの勉

強に役立っています。外国人又上
層のネパール人社会を充分に知る
ことが出来ました。毎日毎日を興
味深く送っております。

「山岳」第五六年を東京の家か
ら転送で最近当地にて入手し、全
章を興味深く拝見しました。特に
この号に載せられた海外登山は、
私が前回ネパールに滞在していた
時のもので、その隊の人々とも直
接知り合っていただけに、中でも
ヒマルチュリ登山の山田氏の文章
は、私も同隊のベイス・キャンプ
まで単身出かけ、丁度登頂成功の
お祝をするという日にベイス・キ
ャンプに着き、彼らの山でのなど
やかな雰囲気を知っているだけに
面白く拝見しました。

今年の日本隊は、ネパール・ヒ
マヤでは岳連のジュガール隊、
日大隊、大阪府大隊、北大隊、全
て登頂に成功しました。が、又外
電にて御承知の如く、フランスの
ジャヌー、ドイツ・スイス合同の
ブモリ、イギリス婦人隊のジャグ
ドゥ川源流域の山々(西ネパー
ル、カンジロバ・ヒマールの南)

も皆初登頂に成功し、インドのエ
ヴェレスト隊のみ不成功でしたが
今年の天候は決して落付いてい
たわけではありません。例年になく
五月頃から既にモンスーンの如く
雷雨の日が続き、カトマンズにて
登山隊の安全を望んでいたのです

が、山ではそれ程の悪天候ではな
かったらしく、今更ながらヒマ
ラの複雑な気象を思い知りまし
た。カトマンズ盆地の気象は少々
独特のものなのでしょうが、一度
日本の気象の専門の方でもネパー
ルに來られ、少くとも一年間こ
ちらに滞在されたら有益なデータが
得られると思います。

今秋は、オランダのニルギリ(ア
ンナプルナ山群の西端)韓国のダ
ウラギリ第二峯、ロバーツ大佐の
チューレン・ヒマール、そしてド
イツ人二名からなる遠征隊が、チ
ョー・オユーの許可を最近つい
に取りました。又イギリス人のステ
イル博士夫妻という人は、当地
のキリスト者合同病院(サンタ・
パワンという日本の看護婦さん二
人がいる所)にいますが、彼らはダ
ウラギリ北のヒドゥン・バリーに
入り、小さい山を登りたいと計画
し、日大隊からの山が未登頂か
聞いたりしていましたが、この地
域には、私どもも是非行って見た
く、今から計画をたてています。

ロバーツ大佐は退役し、今カト
マンズにて毎日のんびりと犬を連
れ散歩などをしていますが、来春
のアメリカーナ・ディレンフルト
のエヴェレスト隊にも参加するそ
うです。またヒラリー卿も来春エ
ヴェレストの南西のタウチエに登
りに八人のメンバーにて来る予

☆びた日で四本程度、穂高の屏風岩から木を除き、雪をつけた様な感じでした。アルパマヨ氷河の末端四二〇〇米にB・C、四八五〇米にC I、南稜の基部五三〇〇米にC IIを建設。C IIより三日間ルートを作した後、四日目にアタック、しかし急な雪壁のザイル工作が捗らず、頂上直下一〇〇米手前で時間切れのため断念。五日目の八月十三日、頂上直下の四〇〇米の雪庇を無事通過して、午后三時、巨大な雪庇の頂上に、一人一人、恐る恐る全員が登頂しました。

このアルパマヨには、一九五一年フランス隊が北稜より北峰に初登頂。その後、一九五七年ドイツ隊は南稜より三日のルート工作後一日ビバークして登頂。一九五九年アメリカ隊は頂上直下三〇米まで行き断念。私共はドイツ隊に次いで、ビバークすることなくアルパマヨの最高点に全員が登頂しました。しかし残念ながら、日本で考えていました北峰と南峰の縦走は出来ませんでした。あまりにもむづかしく、最高地点登頂だけで精一杯でした。もしヒマラヤ七八〇〇米級でこの様な山があったとしたら、登ることは出来ないでしょう。

よ。これから当地は夏に向いますが、雨期に入り、山岳地帯は雪のシーズンとなります。今年のアルパマヨ・プランカにはアメリカ、フランス、アルゼンチン他多数の登山隊が入山しましたが、大きなパーティーは私どもと、チャクララフ東峰を初登頂したリオネル・テレイ（今春ヒマラヤのジャヌーを登頂）が率いるフランス隊と、トリパラフに初登頂したアメリカ隊でしょう。しかし一番の成果というところ、私共がすぐれているようです。

前述の五〇〇米級の三つの処女峯チュルプ、ウアーマンリバ、ミルアコチャと、六〇〇〇米級の最も困難なアルパマヨの全員登頂。そして全員無事元気に過せましたのは、全て皆様のお蔭と深く感謝しています。（中略）

当地のじゃがいもはさつまいもの様に大きなものがあり、日本で食べるよりずっと旨いものです。こんなに旨いじゃがいもはほめてです。

これからの予定は、九月五日首府リマに戻り、荷物整理のかたわら、南米最古の大学サンマルコ大学の訪問、また古都クスコのインカの遺跡、世界一高いところにある湖、チチカカ湖を訪れ、日々親善のかたわら、大いに見聞を広めて参りたいと思っております。

（九月三日付ウアラスにて、吉川尚郎、鍋木昇、松田宛）

↓定です。スイスのトニー・ハーゲン博士は、十二年間のネパール滞在を終え、この程帰国しました。次は南米のどこかに、やはり国連から派遣されることになろうと云っていました。飛行場まで見送りに行きましたが、チベットの避難民が大勢見送りに来て、ダンスと歌を唱い、別れを惜しんでいました。アメリカ、イギリス、スイス、ソ連、イスラエル等の大使館等の外人連が皆集って盛大な見送りでした。

最近のネパールは、王政のもとにもかく落ちついていますし、又役所なども仲々能率も良くなりました。やはり一年一年発展していきます。電気も比較的明るくなりましたし、電話はダイヤル式になりました。国内産業の育成も少しづつ考えていき、それ故、外国製品の輸入に対し、特に登山用消費物資に対して課税するという方針になりましたが、それでは登山隊が来なくなるというので、その税率は極めて低いものと決まりました。十・二十％ということです。又ネパール、中共間の国境協定が結ばれ、その正式な地図が両国政府にて作成されました。

この両国国境地図に依りますとゴザインタンは勿論チベット内ですが、メンルンツェもチベットで、この辺の地図の誤りは完全に訂正されています。チベット逃亡以来

国連のF・A・Oのスタッフとしてネパールに落つてしまった例のP・アウフシュナイダーがネパール側の国境委員会のアドバイザーをしていますから、ヒマラヤに關し、ネパール側は相当に詳細な知識をもっていることと思います。又、ネパール外務省には、チベットのセクション（チベット課）があり、その課長級の役員をしていた若手の歴史学者は前回の滞在以来私の、ネパール、チベット関係史のよき相談相手だった人ですが、彼が国境委員会のセクレタリーをしています。彼はチベット語にも通じ、又清朝時代の中国文献にも大いに興味を持ち、その点では、私がアドバイスをしています。ヒマラヤ地域に関する相当の知識があることはネパール人中第一でしょう。更に、若手の地理学専門のドクター・コースの学生でハルカ・バハドゥール・グルン君というのがあります。名前の如く、彼はグルン族ですが、二世の民族学者F・岡田氏がポカラにて注目し、彼はコロンボ・プランの留学生としてイギリスのエディンバラ大学に入学し、現在ポカラ盆地の実地調査のため帰国しています。私は、こちらにて知りあいましたが、大変親しくなり、彼は現在ネパール外務省の依頼で、ネパール・ヒマラヤ登山史をまとめているとあります。私も前にこの仕事をしたこと

アルパイン・クラブの図書室にて綿密に文献調査し、そして帰国途中チューリッヒのスイス山岳研究財団にて更にデータを集め、ネパール外務省所蔵の各登山隊のリポートを全て参照しての仕事です。私立派なものになると思います。私も日本人の名前のスベリングの間違ひとか、その他に彼に協力しています。六〇〇〇米以上の山をネパール・ヒマラヤ内だけで二七〇座もみつけ、その一覧表までつくっていますが、これ以外にも山はまだありそうです。

私も今秋には、どこかヒマラヤの山麓を歩きたく考えております。では会の皆様等に宜しくお伝え下さい。

（七月二十八日付 カトマンズにて 日高あて）



（斎藤健治氏提供）

成瀬先生——山春生徒

(山崎先生を憶う)

成瀬 岩 雄

先生を此処で友達扱いにするのは恐縮な事であるが、それは山が結んだ御縁として暫らく、平に御容赦を乞うとして……、要は此処に披露するオーストリアの生んだ彼の高名なる登山家、ユーリアス・クギーについて、先生と数回手紙を取交はした時の事、先生御自身の筆になる「成瀬先生——山春生徒」を以て終止符を打った問答集を見ていただければ読者にも暫時の御容赦は願えると思うからだ。

それはいつか北海道で国体をやった時の事、数日、先生のお宅に御厄介になった時、談、偶々クギーの事に及ぶや先生は突然、我が意を得たとばかりに、相好を崩して語り出されたのがこの問答集の起りで僕もクギーの優美な、ロマンティックな名文には以前から感激措く能わず、耽読した事もあったので大いに意気投合した事は事実であった。

もともと先生のはドイツ語の原書の“*Am dem Leben eines Bergsteiger*”で僕のはその英訳“*Alpine Pilgrimage*”からの知識だからお話にならないのだが、其後、東京に帰ってからクギーについての先生との書翰の交換は暫らく続けられ、実は昨年久振りにまたクギーの新たな一文について一筆啓上、病床の先生を大いに慰めようと

思っていた矢先に、突然先生の逝かれた知らせを受けてしまい、今となってはせめて先生のかいぎやく味の溢れた書翰の原文をその儘此処に掲げて共にクギーを語りし日を思ばねばならないのは誠に残愧にたえない事だ。

○ 山崎先生書簡 その一V

先日は折角の御光来を万事不行届きて恐縮して居ります。兼ねて自慢の菜園の所産も本年は散々の不出来にて書き入れの時期に畑は見るも哀れな有様、しかし皆様が快く御宿り下さったことは一同誠に喜んで居ります。大風一過のあとガランとした部屋に一同集まり互に顔を見合せて破顔一笑……、あゝ面白かったと申し合ったことです。

長崎カステラの思ひかけぬ御恵与に、我家の二人のより良き半性の人にはもともと九州人のこととて、そしてこれは自分たちのみが賞味する権利があると考えたのか——こんなことをなすっては何もらないわねなどと一応は申しながら早速の所大スピードを以て処分中です。あとにも先にも札幌へ参ってからこんな騒ぎはなかった代りにこんな愉快なことも御座いませんでした。

又、御手紙で甚だ恐縮しました

たが私も大へんに嬉しく感じましたのはJ・A・C第一の古典の權威に親しく色々伺い得たことです。

数十年間、一人で読んで誰も話相手と申しては他に御座いませんでしたから丁度註釈なしに原典にぶつかって居た様なものでした。私も久振りでクギーを引出して読んで見様と存じて居ります。

札幌はあれから今日になってやっと少し青空です。中村清太郎画伯は今迄どこで雲隠れなさって居られたやら……。まださっぱりこちらは暑くならず、作物は大不良とか、皆よりよろしく申上げます。昭和二十九年八月十日 山崎 生

成瀬 岩 雄 様

○ 同 その二V

此頃よく中間報告という事を申します。が、このはがきはそれに類する中間御返事です。

クギーの頁、二百いくらの御仰せでおかげ様で十数頁ばかりをあとにたどって三百何頁かで例の句で初まる項を見出しました。三版はそれだけ前がふくれたのでしようか。組み方の相違でしようか。ルフトマン・ジョンソン氏など云う名前は勿論前のときは頭にも残りませんでした。



した。今度はおかげ様で大へんはつきりしました。昔、一高の岩元先生が図書館でしらべて来てはゲエテの伊太利紀行を教えてくださいました。そんなことを思い出します。

北海道には只今松方氏が来て居られ今夜稚内（釧路、根室、網走、阿寒、稚内！）のかへりにうちに来る由です。

先日例の植物園の緑の部屋で皆と会談しました。シュレックホルンの話で松方氏が「マサカー」（後註参照）と云ったことは私がこゝに紙の上に黒く確認いたしました。

昨夜松方氏、道内旅行の帰り訪問されました。陛下の室（網走）にとまった由です。

八月三十日 山崎 春 雄
成瀬 岩 雄 様

註 在札中、スキス遊学中に先生御自身の登られた山の話などに花が咲いたままシュレックホルンの話になった時、レスリー・ステイブンが初登頂の節山稜遙か下の方にドイツの登山家、フーレンベルグ Edward von Fellenberg が同じくシュレックホルンの登頂を目指して登って来るのを見たストーリーは「初登頂はこっちのものだ」とばか

りに石を蹴り落したという事がフエレンペルグの著書に書いてある、と書て、松方氏に話したら松方氏は「マサカー」と云ってましたよ、と先生は僕に語られたのだが、松方氏ならずとも、僕だって疑いたくなる様な気持ちだし……第一、先生自身だって当初、内心は案外「マサカー」と思われたに違いないと思うが文献に判然表われた事実は「確かに事実」なのだから、一大発見よろしく得意気に話されたに違いない。その時の先生の気持ちもよく判るし、又、一方、いやしくも紳士の国、イギリス登山界の長老、と自他共に許していたステイブンともある者が……位の先入観で、「マサカー」と云ったに違いない松方氏の気持ちも、共に僕にはよく判る。その時の御二人の顔も、想像出来る楽しい話だ。

それだけに僕も東京に帰って在札中の御世話になった御札の終りに「松方氏には未だ例のステイブンのシュレックホルンの話してありませんが……」と附け加えて置いたら又々、御丁寧に「ここに紙の上に黒く確認して置きます……」なんて云って来られたのだが、先生に見れば折角発見のこのエピソードが又々あつさり「マサカー」で片附けられては……と氣に掛けられたのだろうか、それとも、僕に早く松方氏に「山崎が斯う云ってました……」位の催促の気持ちもあつたかも知れない。何れにしてもあの時の先生の得意氣の御顔は今以て僕には忘れられないのだ。

〇 ● 〇

△その三V

珍らしい大雪に埋まってゐる北海道——ことに札幌が中心の由——へと、もう桃の花や菜種が咲き、浜の波の音も眠氣を催すだろうと思う湘南の方から嬉しい便りが届きました。

こちらでもこの頃、トリエストの聖者——クギーはトリエストに住む(筆者)——の書は書棚からぬかれたまゝそこらに転がって居ります。この前の御手紙は八山

の再会Vの頁(私の本では二百三十五頁です)に、はさんでしをり代りになって居ります。赤いリボンのような可愛いしをり——と著者が心あはらば思うことならん。惜、今度は又、二度目のしをりが来ましたがこれは昨晚、早速さがしてそこに挟んでおきました。私のは百八頁となつて居ります。

所が今日は私の教師本能がさせるわざですが、こゝが書中に至る所出て来るクギーの中でも一番よく利いて打込まれてる釘の一つと存じ、ことに少々神経質になつたのですが、山登りはホンの瞬間のエピソードだなんて如何にもクギーらしい文句ではないでしょうか」という御説です。点の悪辛い語学の教師は自分の訳をつけた通りでないとい間違ひだとして相当の点を引くといことですが……。それで誤訳ならば幾重にも御かんべんを願うとして……。

山は私等の敵であるべきぢや無いんだという書出しから五行目にエピソードという字が出て参りますが私の本ではこうなります。

「アルピニズムとは戦闘でもなければ戦争状態でもない。戦闘は単に時として一挿話として、一現象として在り得るのみだ。登山の根本は常に自然と山への純粹の愛云々……」

前記の通り私の教師根性は長年に亘り性質になつてしまつて居るというのは藤島敏男さんならばその通りと賛成される

でせうが、私はなるだけそうなり度くないと慎んで居るつもりがたまに挿話として一ビルドとして発現したにすぎません。どうぞ悪しからず。

マヌスル延期でクンクンは少し腰をおちつけて勉強が出来そうです。しかし彼の研究材料は北海道の高い所の沼にすんでるので天幕や他の装備を持って山へ行かなければなりません。研究室の虫共にはやはり出来ないことですね。先づは取敢えずこんなことを申上げ恐縮千萬です。

昭和三十年三月五日 山春先生
成瀬岩 雄 様

△その四V

五日の日にクギーの事で御手紙を差上げましたがあとでこれはこちらの早合点だったと思ひつきますと今度はこちらは大恐縮、そちらの二枚目は「山登りはホンの瞬間のエピソードだ」なんて如何にもBourraらしい文句ではないでしょうか。

とある所が私にはクギーらしからぬ言葉だと感じてそれから答案を調べる教師根性になつてしまつたのでした。落ちついて読んで見れば間違ひみたいな事を申したのは小生の大失策でした。幾重にも御ゆるし下さい。

「登山にもそれは戦みたいなのはあつてもほんのエピソードが場面みたいなのとしてあるだけだ」というそれを省略して書いた答案を意地の悪い教師が点を

つて様としました。先づこの事件はこれで御勘辨を願ひます。

クギーの前半、東の方の山地旅行の部分は地図がないのですから今迄あんまり熱を入れて読みません——もっと正直に——ちつとも読みませんでした。御指示に従つてこれから始めからずつと奉読いたすことにいたします。そうすれば貴兄は他人の心の中に最も美しいお花畑を新に種をまかれたという善果をつまれたお方になります。罪ほろぼしに精々お土砂をふりかけつゝ、

三月八日 山春生徒
成瀬先生

〇 ● 〇

クギーを中心に先生と僕の書翰の交換はこの△成瀬先生——山春生徒Vの書翰を以て終止符を打つたので茲で僕は本来の真意に帰つて先生を「友達扱い」にする事にも終止符の釘を打つ事になるのだが、両者が先生になったり、生徒になったりした先生からの来信に対してはその都度、いつも、一言も語らずして既に相手に信頼感を抱かせる様な、先生の、あの温顔と微笑を思い浮べながら読んだだけに、今となつては僕にとつては之等の書翰は貴重な、先生の形見となつてしまつたが、此度、札幌に行く様な事があつたら、お土砂ではない、是非一輪の花をたむけずばならない。先生の事だから勿論、針ノ山からのお迎えは来なかつただろうから、蓮のお花畑に鎮座ましまして居られる事だろう。(六二・八・七)



川喜田 杜太郎

黎明期の二高山岳会

横田 敬一

二高山岳会会史としてまとめたものは大正十五年に佐山英駿、佐々保雄の両氏が編纂したものと、昭和十二年に、青木大五郎氏がこれを再編したものがあるだけである。故沼井鉄太郎氏は大正七年二高を卒業されたが在学中は山岳会の有力なメンバーであった。戦後沼井さんは新たに二高山岳会史を編纂することを志され私も先輩の方々から資料を集め準備を進めていたが、思いがけなく沼井さんの急逝に遭いこの仕事は頓挫した。諸先輩から寄せられた資料は取りあえず生のまま昨年東北大学の学生会報五号に載せておいたが、二高山岳会創立当時のことは日本山岳会会員の皆様にも御参考になるかと思ひ、私の知り得た範囲でまとめてみた。

二高山岳会という名称は現在二高山岳部OB会の意味に使っているのだが、もとは山岳部誕生以前の有志の会の名であった。会の発足は大正三年六月八日である(同月三十日という説もある)。創立者は植村癸巳男氏(大四卒)、石川欣一氏(大五卒)等で植村氏がリーダーであった。木暮理太郎氏(明三十二卒)は山の大先輩として若い学生の心に影響を与えていたようであるが、山岳会の創立には関係しなかった。また当時の会員はいまという部員とは違い単なる同好者もしくは共鳴者の集まりであつたらしく、先輩の方々に聞いても誰が会員であつたか明確でない。会員数については熱心な会員であつた小倉謙氏(大五卒)の当時のメモによると、六十余名であつた。やはり会員であつた藤井潔氏(大六卒)が大正四年同窓会に「創業未だ一歳にして会員は六十余名に達して居ります」と報告しているところから見ても、六十余名という数は間違いないと思われる。

そのころ二高に科学部というのがあり、この方でも、山岳の研究旅行を行なっていた。小倉氏は科学部の催しにもしばしば参加し研究旅行を共にされたようであるが、逆に科学部の委員の神田茂氏(大五卒)が山岳会の旅行に加つたこともあつた。前記の藤井氏も科学部の委員であつた。昔の高校生にとって山岳旅行というものがいかにか魅力的なものであつたかがわかる。

当時学年は九月に始まつた。大正三年七月一日学年試験が終わるのを待つて山岳部の発会式を兼ねて第一回行軍が栗駒山須川温泉・鬼首方面に挙行された。参加する者十一名(小倉神田両氏参加)。小倉氏の記録によると、第一日仙台―ノ関―須川温泉、第二日須川温泉―湯浜温泉、第三日湯浜温泉―轟温泉(鬼首)、第四日轟温泉―川渡―仙台というコースであつた。新学年の十月三日には新入生歓迎を兼ね泉ヶ岳登

北海道の穴

一奥尻の沢歩き―

森 谷 虎 彦

夏になると観光を兼ねた登山客が本州よりドツと押寄せて、静かな登山を楽しんでいる吾々道内登山人をガツカリさせる。登山ブームとは言え、まだまだ北海道の山は夏の一時を除けば本州とは比較にならない程静かである。ブームに追われて逃げ廻る吾々を追いかけて、遂に秘境知床も、夢の島利尻礼文もハイキング地と化し、日高山脈の中心部幌尻岳のセツ沼カルルも北アの湖沢並になつてしまった。

そこで、大部分の人達が函館から真直ぐ道中央部へ急行するの逆を行つて、函館の西方、江差追分まで名高い江差町より船便で奥尻島に渡る。

島の最高峰は標高585mの神威山で、高さとしては極めて低く、且つ頂上には航空自衛隊が居を構へ、立派な軍用道路があるので登山そのものとしては全く興味の持てない山ではあるが、本島には多種多様な火成岩類があり、特にこの神威山は花崗岩類で構成されているので沢歩きが楽しめる。

役場所在地の奥尻(旧名釣懸)市街附近より入る釣懸川は頂上近くまで花崗岩類が河床に露出し、シッカリしたホールドがあつて棚あり、崖あり、滝ありで非常に変化

に富み、存分に沢歩きを楽しめる。私が歩いたのは九月であるが、崖の上の樹々は一部すでに黄葉し、うっそうと樹木に覆われているが沢の中は白い花崗岩のため比較的明るく、又此の時期になると殆んど一人の同業者(?)にも会わず、全く静かな沢歩きが楽しめる。又特に北海道の山の独り歩きが一番ユウウツな熊に出会ふと言う心配は全くない。北海道の離島には熊は居ないからである。

此の沢の中流以下にはヤマメが沢山居るが、釣に入る人も殆んどいないので素人でも十尾や二十尾は楽に釣上げられる。一般に海の漁師は陸の魚には興味が無い様である。

海岸からヤマメ釣を楽しみ乍ら登つても三時間もあれば自衛隊の建物の下に出られる。沢には一ヶ所大滝があり、捲かねばならないがあとは殆んど沢通し登れる。奥で沢は三本に別れるが、面白さは右俣が一番である。但し魚釣りには左俣が良い。

降りはこの釣懸川の支流を降るのも良いが、此の島のタマの温泉を楽しむのも面白い。

自衛隊専用道路を降ると道は広い稜線上についているから四囲の風景を楽しみ乍ら西海岸への分岐点より道を左幌内海岸へと取る。約5kmの立派な林道を行くと海岸へ出る約300m位手前右手河原の中の稍低まつた所にポツンと一軒家がある。これが村営温泉小舎である。脱衣場と浴室が一つあるだけで混浴である。番人は居ないし、戸はいつも開いている。この世智辛い世の中に入湯税も取られない温泉なんて、全く得難い存在である。

☆

山を行なった(参加者十一名)。三日午後仙台を立ち根白石に泊り、翌日泉ヶ岳の頂上をきわめた。

大正四年五月卒業生送別会を併せて第一回山岳講演会と展覧会を開催することとなり、日本山岳会幹事高野鷹蔵・辻村伊助の両氏を招聘し、また幻灯写真映写も行なった。このとき発行された記念絵葉書一組(写真二枚)は植村、小倉両氏が保存されている。講演会は新築の理科大学講堂で行なわれたが、仙台市のあらゆる階級の人を網羅し満員の盛況であった。展覧会は二高で行なわれ、市内各学校からの団体で賑わった。(学校の卒業生送別会は五月二十六日であったが、講演会がこの日に行われたかどうかは不明である)。

暑中休暇には各自が日本アルプス方面で活躍しその報告会を九月末校内で催したらしいが、詳細はわからない。十一月十三、十四の両日は二十四名の多数で泉ヶ岳登山を行なったが、参加者の大部分は新入生であったという。これより先九月十八日の新入生歓迎会の席上で藤井氏が山岳会のことを紹介したという記録があり、新入生が大挙して山岳会に参加したのは藤井氏に負う所が多いと思われる。

大正五年にはいって山岳会の活動は一段と活潑となり、五月下旬残雪を踏んで南蔵王の屏風岳に登頂した。小倉氏の記録によると、同行者は守屋、早野、榎山次郎、宮本章の諸氏。五月二十日午後仙台―白石―鎌先、二十一日鎌先―不忘山(御前岳)―

屏風岳―不忘山―鎌先(午後八時着)―白石、二十二日早朝白石―仙台というコースで、道案内をつけたが、不忘山屏風岳間には道がなく大難行したという。

夏期休暇には山岳会として始めて日本アルプスに野営旅行を試みた。第一班は七名で針木峠立山白馬方面に十三日間、第二班は十名で常念岳槍ヶ岳乗鞍岳方面に十一日間の予定で七月二十日に出発した。第一班は始終雨に降られ憧れの剣岳を放棄し立山より越中に下ったが、第二班は晴天続きで無事登高を続けた。沼井さんが「音信の内木暮さんと私」(山岳第五十二年)の中で、大町で今村幸男氏(明三十卒)に偶然逢ったと記されているのは、この第一班に参加しての途中のことであった。

新学年の九月になって日本アルプス班の報告会を開き、十月には蔵王刈田岳登山を行なった。このころ山岳会会員の数は百名に達していた。山岳会の事業として、仙台付近の山々に道標を、丘陵には展望図を設け、更にこれら山地の案内書を作って同好の士の便宜を計ることを企てていたというが、沼井さんあたりがこの計画の熱心な推進者であっただろう。ちよつといまの学校山岳部では考えられないようなおおらかな時代であったようだ。

二高山岳会の創立時代は何しろ私の生れる前の話で、私の思い違いや筆の足りない点が少なくないと思う。詳しい資料を御存知の方にぜひ御教示いただきたいと思う。

(十月一日記)

☆湯は鉄硫黄泉で、泉源温度は60度以上ある。鉄泉で湯に多少の赤錆のあるのが難と言えは言えるが、夜になると幌内部落の人達が入りに来るが、昼なら入る人もなく、静かな山の湯の気分が楽しめる。幌内は二〇戸位の小部落で勿論宿泊所も商店もない。

沢歩きのを洗いを洗って、元来た道を奥尻部落へ引返し、船便で江差又は瀬棚を経て函館本線に乗り継げばその日の内に札幌又は函館に着く事が出来る。

時間があれば幌内より海岸沿ひに南下して、海岸の諸々に湧出する天然の温泉で野天風呂を楽しむ事も出来る。

江差―奥尻(青苗港)間三時間半、二等片道四七〇円、瀬棚―奥尻港間二時間四〇分三三〇円、東海岸にはバスが運行しているが、西海岸及び、幌内へ行くバスはない。船も風波のない限り毎日運航している。一日一往復で江差発一三時、青苗発八時、瀬棚発一五時、奥尻港発六時となっている。

冬の山を夏山の

つもりで

熊本 荒尾 宏

吾平山相良寺と言へば、山鹿温泉から、首石峠(四一九米)を越えてほんの三時間行程である。茲に特別天然記念物相良飛蔓があつて、古来日本唯一株。小泉源一博士は *Mucuna sempervirens* HEMSLEY 即ち

中部支那の油麻藤と断じ、中井猛之進博士は *Mucuna Japonica* NAKAI として日本固有新学名を宣せられた。由来これ三十年未だに之が解決しないのは、結果しないからで。

今年虎年。この大いなる肥後の不稔性を結実させ二つの学名を一ツに整理しようとして三月末から通い続けたが今や結果に成功し近く植物学上のトップニュースを報道しようと思うが、それは専門誌上にゆずるとして、其の奥更に二十軒。鬼の洞の仙境を紹介しよう。

熊本県側から大分県側へ越えて鯛生金山を通る国道は、かなり早く拓かれ、八方ヶ岳(一〇五一、八米)の肩を通る。鬼の洞はその北国見山(一〇一八、三米)と三國山(九九三、八米)を結ぶ棟梁線の中央部より南に派生するひどくガレたやせ尾根で、あまりやせすぎて左右の谷から孔があいてしまったその孔の事である。

私ははじめ洞とあるからには洞穴の事を想像して踏査に行ってみると、実はそうではなかった。阿蘇熔岩の砂礫が集塊して固つたもろい地質だから、ガレもはげしく、長い高い深い谷そのものが、このガレの連続で而も欠崩は古く、ヒメコマツ・モミ・ツガ・シャクナゲ・ツクシシヨウジョウバカマ・イワタバコ等が着生し、趣のあるものである。これをこのまゝ越えると福岡県側であるので、三國山の名の如く、肥後・筑後・豊後の背中合せのところである。此処は又シダ類の希品カネシダの発見地として有名である。

すべて九州の低山は雪と熊に恵まれないので、落葉で山のすけた枝下を、夏山のつもりではいいいとおすすめる。



夜木猪之吉

図書紹介

ニントン) * ウ
エスト・ネパ
ルの三カ月(タ
イスン) * エヴ
エレスト遠征一
九二一年、バロ
ックの日記第一
部、ほか。

フィレンチの告
別の演説は、サ
マヴェルに会長
を引いた彼が

The Alpine Journal

Vol. LXVII, May 1962, No. 304

アルパイン・ジャーナル五月号
は相変らずおもしろい内容を感じ
ている。主な内容は

* 告別の演説(フィレンチ) * マ
ツシャーブルム登頂(ホーンベ
イン) * マッターホルンの北壁(マ
ーチャート) * 豊富なシーズン(ク
ロウ) * スワット・コヒスタンの
旅(ミルス) * シェケルダの横
断(マクインズ) * ハイ・アトラ
スの単独登山(ノイス) * 王立空
軍カラコルム遠征一九六一年(ス
ミス) * マッターホルンの単独横
断一九六一年(ワトスン) * グラ
ンド・キャブシンの東壁(G・ス
マイス) * ケンブリッジ・カナダ
極地遠征一九六一年(ロングフ
ード) フレネイの中央岩峰(ボ

昨年十二月アルパイン・クラブ
で朗読したもの。今度の号で目
につくのはアルプスのバリエーショ
ン・ルートの登攀の記事に、かな
りのスペースがさかれていること
である。クロウの「豊富なシーズ
ン」はドロミテのシマ・オベス
・デ・ラヴアレド、マルモラダ、
シベタからさらにシマ・モニに向
いシマ・モニ・エギューの完全横断
をやっている。モンブランのフレ
ネイ氷河から三九〇〇メートル一
気につきあがっている花崗岩の岩峰
——セントラル・ピラー登攀の報
告も迫力に富んでいる。海外の記
事ではやはりなくなったノイスの
書いたものがとくに目を引いた。
モロッコからサハラ沙漠にそびえ
るアラビヤの山々の模様を、ノイ
スはきわめて幻想的に物語ってい
る。そしてその感想を彼は次の詩

にたくしている。

“The silence that is in the
starry skies,
The sleep that is among
the lonely hills.”

克明に記されたバロックのエウ
エレスト日記も注目をひく。なお
この号から編集主任がキーンソー
サイド氏からオックスフォード大
学のA.D.M.・コックス氏に変わ
った。(Y・Y)

山のガキ大将たち

三田 幸 夫 著

三田さんの書かれるものは何時
読んでも楽しく読める。かざりけ
もなく淡々とした文章であるが、
そこにはユーモアがあり、内容は
蘊蓄をきかしている。三田さんと
あって直接に話をきいている様に
スムーズに読め、読んだ後は不思
議と嬉しくなってしまう。これは
内容がすべて、苦勞してえられた
体験によるものであり、我々山登
りをするものにとって共感をよぶ
ところが多いためであろう。

これで三田さんの本は前著「山
なみはるかに」(一九五四年、白
水社)、遠い山遙かな旅(一九五
六年、新潮社)について三部作が完
成したわけである。
この本に収録されている文章の

大半は前著をだされた後に、比較
的近年にかかれたものであるが、
中には前二著に採録されなかった
大正末期の学生時代のものも入っ
ている。しかしながらこれらを四
つのブロックに上手にまとめ、三
十年前の文章の次に、最近そこを
訪ねたものを並べるなどして、な
かなか配列には苦勞されているの
で、読者はこのギャップをそれ程
気にならずによめる。

たゞ欲をいえばこの三部作をバ
ラバラにし、第一部、ルームの頃
第二部、ヒマラヤへの道、第三部
マナスルに登る、とでもしてこれ
を年代を追ってまとめた素晴ら
しいものができるだろうと思う。
何時かチャンスがあったら是非だ
してもらいたいものである。

三田さんの書かれたものは、す
べてロマンチックな文章で、前二
著の「山なみはるかに」「遠い山
遙かな旅」は、内容にピッタリと
した題名であった。ところが今回
のものは、「山のガキ大将たち」
と内容とは全くかけはなれたもの
だけに失望させられる。

このタイトルはおそらく出版社
の希望によるものであらうと思
うが、やはり三田さんの本ならば、
三田さんの文章にマッチした、ロ
マンチックな題名にしてもらいた
かった。「遙かなる旅路」とかい

37年度第4回図書委員会

八月二十日・ルーム

- ・出席者 徳久、鈴木、大橋、小沢、長谷川
- ①和書整理報告、新刊単行本寄贈依頼の件、雑誌欠本報告 (小沢)
- ②洋書整理報告 (長谷川)
- ③海外登山資料収集経過 (古川)
- ④アビ、雪男隊・大阪市大隊より受け入れ
- ④レジスター作成経過、リストは完成
- ⑤調査用紙発送依頼中 (徳久)
- ⑥会報掲載・受入図書原稿作成の件 (大橋)

37年度第5回図書委員会

九月十一日・ルーム

- ・出席者 小林、深田、鈴木、大橋、古川
- ①索引カード作成の件 (大橋)
- ②和、洋、書名、著者名各索引カード完成、近日中に公開できるように整理する。件名索引の利用度が高いと思われるので著者名カードをJAC分類基準により臨時に件名カードとする (大橋)
- ③洋書整理報告 (長谷川)
- ④現在山岳をもととして16隊分を整理 (古川)
- ⑤新規購入図書について (小林)
- ⑥図書委員会主催で秋に小集会を講演会・展示会を催したい (深田)

- ⑩The New Zealand Alpine Journal, 1960 XVIII
New Zealand Alpine Club
The New Zealand Alpine Journal, 1961 XIX
New Zealand Alpine Club
- ⑪Österreichische Alpenzeitung Sept.~ Oktober 1961
Österreichischer Alpen Klub
Österreichische Alpenzeitung Jan~ Mai 1962
Österreichischer Alpen Klub
- ⑫Rivista Mensile N. 11-12 1961
Club Alpino Italiano
Rivista Mensile N. 1-2 1962
Rivista Mensile N. 3-4 1962
Rivista Mensile N. 5-6 1962 (係鈴木)

うように三田さんの文章を、題名を聞いただけで思いだせる様なものであって欲しかった。

(B 6 版、本文三一四頁、写真八葉、一九六二・七、二玄社発行。四五〇円)

山を想へば

百瀬 慎太郎 著

大町対山館の主人であった故百瀬慎太郎氏の遺稿集である。紀行随筆編、短歌編、往復書翰編の三編にわかれ、巻末にくわしい年譜と、石川欣一、伊藤孝一、小笠原勝三氏による追悼記がのせられている。明治の末期から大正、昭和にかけて、北アルプスを中心に発達した日本の近代登山の玄関が大町である。ここに居をかまえ、その発展にすくなからぬ力をそえた故人の素朴な情熱が、この書物をおしてひしひしと感じられる。

とくにその初期の紀行は、北アルプスがまだほとんど未開な状態にあったころのものだけに、そのころの静かな山の雰囲気がよくにじみ出しているのは楽しい。残念なことには、はじめの、後立山連峰逆走記にしろ、鳥帽子より槍ヶ岳への縦走にしろいずれも未完のものだったことである。大正二年七

月になされた百瀬氏一行の鹿島側からの五竜への縦走は最初の記録であるだけに、正直なところ小生は非常に期待して読んだのであるが、筆は八峰通過まで及んでいなかった。

この紀行随筆編には入っていないが、後立の逆走記をはじめ古人はかなりくわしい報告をいくつか当時の「山岳」の会員通信欄にしている。これらをあわせて収録しておいてもええたらと、これは誤植もかなり多いのとともに惜まれる。

案内人組合に関するいくつかの記事もまことに貴重であり、多くの岳人との往復書翰編も古人の徳をしのばせる。山の本も最近これとは思わせるものほとんど接しなかったが、この本は小生が最近読んだものの中で、山の気分がじかに感じられたものの一つであった。

(山崎安治)

昭和三十七年八月十日、長野県大町市八日町百瀬美江方百瀬慎太郎遺稿集刊行会発行、頒価六百元。

溪(たに)

冠 松次郎 著

著者は縦走により僅かに峯頭に足跡を印することが、山のもつ神

秘とその複雑性を味わわせるものでなく、山と共に溪谷を探ることにより真に山の一切を知ることになることを、多年の体験により信ずるに至ったと告白している。それは少なくとも日本の山に関する限り、飽くまで真理であると筆者も信じて疑わない。

日本アルプスの名付親ウエストンは、日本の山岳の最もいいものとして、溪谷と森林との美をたたえている。日本の山がヒマラヤやアルプスのように氷河をもたないことを残念がる人が多いようである。しかし氷河がないために、あのような、汚ない濁った流れでなく、神河内の梓川や黒部川や、その他多くの清流をもつことが出来るのだという見方も成立たぬことはない。この点において筆者は著者と同意見である。

筆者は日本の自然の代表的なものは溪谷であるとい前から考えている。よく考えて見ると日本において山のない地方は殆んどなく、山のあるところ必ず溪谷があり、それ等はどこかに優れた風景をもっている。山は溪谷を作り、溪谷は山を引立てる。富士山のように溪谷をもたない山もある。しかし富士は多くの秀麗なる湖水や、井ノ頭のようなすくれた噴水地帯をもつことにより、それを補って余

りある。

本書はそうした著者の観点に立って溪谷を取扱っている。これ等の溪谷は、主として日本北アルプス、南アルプス、奥秩父のそれ等である。しかし何としても氏の最も得意とする溪谷と言えは黒部峡谷であろう。

本書は著者が新しく書き下ろしたものに旧稿を交えてまとめたもの。日本の南北アルプス、奥秩父の優れた溪谷に関する限り、悉く叙述されているといつて差支ない。書物の装いもよく、写真も珍しい。

(田部重治)

A5 版二六三頁、一四〇〇円、昭和三十七年七月、筑摩書房

山の本偶感

最近の本で、山の本ではないが「驚亭金井日記」「喜多村緑郎日記」などの芸界ものを興味深く読んだ。

登山の世界でもこういふものが、一つや二つあってもいいと思うがどうだろう。仮に「大島亮吉の日記」というものがあればやはり面白いと思う。山登りは他人に見せる競技ではないから登山者は書物や文章によって自分と人とのつながりを求める。登山が隆盛な昨今山の書物の出版は多い。しかし概ね山と相對したときの筆者の他所行きの姿が出ていた。晴れ姿でない日常浮世の苦勞をしつつ市井にあって山を考へる人の生活を知りたいと思う。楽屋のぞきの悪趣味かも知れない。しかし後世登山文化を理解する資料の一つにはなる。

(F)

“近着 外国山岳会誌” 紹介

- ① The Alpine Journal 1961 LXVI
The Alpine Club
The Alpine Journal 1962 LXVII
The Alpine Club
- ② The American Alpine Journal 1962
American Alpine Club
- ③ Appalachia, Bulletin 1962 Jan~Aug
Appalachian Mountain Club
- ④ De Benggids Januari 1962
Nederlandse Alpen-Vereining
De Benggids Maart 1962
Nederlandse Alpen-Vereining
De Benggids Mei 1962
Nederlandse Alpen-Vereining
- ⑤ Canadian Alpine Journal 1962, XLV

- Alpine Club of Canada.
- ⑥ Halfyearly Newsletter No.7 Jul. 1962
The Himalayan Mountaineering
Institute, Darjeeling
- ⑦ Journal, SSFA, 1962 IV
スイス山岳研究財団
- ⑧ Journal of the Mountain Club
of South Africa, May 1962
The Mountain Club of South Africa
- ⑨ Jugend am Berg, Sep. 1961
Jugend am Berg, Dez. 1961
Jugend am Berg, März, 1962
- ⑩ Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins
Deutscher Alpenverein
Mitteilungen des Deutschen Aug. 1961
~ Dez 1961

- Deutscher Alpenverein
Mitteilungen des Deutschen Jan 1962
~ März 1962
- Deutscher Alpenverein
- ⑪ La Montagne et Alpinisme, Fevrier 1961
Club Alpin Français
La Montagne et Alpinisme, Avril 1961,
Club Alpin Français
- La Montagne et Alpinisme, Juin 1961,
Club Alpin Français
- La Montagne et Alpinisme Octobre 1961
Club Alpin Français
- ⑫ La Montaña Diciembre 1961
Federacion Argentina de Montañismo Y. Afines



吉之猪木

会員通信

タップリの一日コースだ。四年前に藤島さん達の努力で切り開きをしたと伺ってはいしたが、藪は所々深い。

コースは全般に眺望は良いが相模山から

朝日連峰より三面川へ 池田 光二

朝日鉱泉を起点に大朝日岳から主脈を北走、前夜は竜門山北稜の雪田の辺りを泊り場とした。

ヒナウスユキ草の群落を縫って道端の苅をつまみ乍ら、寒江山の三つの頭を越え、北寒江から西へ相模山の尾根に入る。静かな美し

い此の山群は更に脇道に入ると静けさ一入だ。ニッコウキスゲの黄色い絨氈にヒメサユリが点々と色

を添える広い稜線を気持ちよく降ると、相模池の素晴らしい泊り場がある。此処から西南に延びる稜線を

大上戸山へ、山頂で西北に転じ図上二、二二二(沼倉山)から九八九(道陸神峯)へ、更に西南に旧道に合し三面川、黒倉沢合流点右岸の源蔵小舎に至る尾根コースは

三面間に定期バスもある。此処では塩野町図幅は三面、猿田の各人造湖の修正記載のないものは役に立たないから念のため。途中、我々と逆に登高する大学グループに二、三出会ったが、楽しむ為には下降路として利用すべきだと思った。

好天に恵まれ我々は予定通りに三泊四日のコースを終ったが、この新潟県側唯一とも云うべき朝日登山路は、国立公園の看板のみ立派にし、パンフレットを配っても、未だ一般大衆コースとしての資格はないというのが我々の偽らざる感想であった。

(三七、七、一七二〇)

一行 松本熊次郎、村井米子、村上勝太郎、鈴木英一、池田光二、他

パンフ便り

村山雅美

コロラドボルダーからグワンクバーへの自動車旅行の途次パンフにきています。九月一日 SET Field Guide まで行って来ました山岳会では三田さんのアルパタ行のとき同じ汽車に乗り合せたという Mrs Munday にあいました。まことに美しい山・森・町を眺



カット・佐藤久一朗

九月理事・評議員会

十三日・ルーム

▽松方会長、三田副会長、理事折井、辰沼、山崎、川上、中島、金坂、村木、田村、高橋、徳久、田辺、皆川、古沢、監事野口、松本評議員神谷、篠田、深田、藤島(敏)。織内、石原東京支部長、東京支部岩佐。

委任出席、望月、交野、今西(錦)、今西(寿)、藤井、青木、伊藤、池田、藤木。

▽議事と報告

- ①「山岳」第五十七年について、五十六年と同様に広告料収入は二十万位を確保したい。
- ②立教大学山岳部創立四十周年記念会(十月五日)について
- ③本会より松方会長出席の予定。
- ④映画「ヒマラヤK2」推選について
- ⑤標記についてイタリーフィルム社より依頼あり、推選承認。
- ⑥「山日記」について
- ⑦十二月中旬発行、予定通り進行

- ⑤夏山診療所について
- ⑥各大学医学部山岳部の夏山診療につき、その報告会を月末に予定している。
- ⑦静岡県支部の台湾遠征について
- ⑧明年一月渡台の予定で、台湾山岳協会と連絡中。
- ⑨登山技術研究委員会について
- ⑩三回にわたった技術講習会も終了したので、反省会を九月二十八日体協会議室で開く。
- ⑪十月小集会について
- ⑫全岳連の「ビックホワイトピーク登頂報告」をお願いする。
- ⑬図書委員会報告
- ⑭すでに和書の目録を出したが、洋書についても今秋中に整理したい。
- ⑮会員から「山の本」はどんなものから読んだらよいかとの質問が多いので、山岳会として基本図書の選定をしたいと考え、現在小林委員にその選定をお願いしている
- ⑯古い会員について、いろいろな角度から調査資料を作りたいので協力をお願いしたい。
- ⑰ヒマラヤ委員会の新編成について
- ⑱登山技術委員会の予定の講習会も終了したので、会として海外登山遠征に関し研究をすすめてきたが、ヒマラヤ委員会と登山技術

めて感心しています。ハミリ、よく写っていたら御覧に入れましょう。レイバーデイの休日を控えてパンフも賑やかです。

(九月二日朝、雪のふるアルバインモデルにて、三田副会長あて)

ティロールとシャモニーから

松本義夫

今年の春は四月十五日から月末まで、ティロールに遊びました。相棒のドイツ人モリツ・ペイルと三千七百米台の山に七つばかり登りました。しかしその間、いつも苦勞したのは言葉で、唯一の共通語のフランス語をどんなに恨めしくおもったことでしょうか。ザイルを引くのは、ザイルが出ず、プラブラのザイルのまゝ登ったり、散々でした。スイス、オーストリー、イタリアの山小屋、みなスタイルがちがひ、日本の山小屋などとは到底比べものにならず、快適なものでした。しかし温泉のないことですべてが帳消し、山の大きさ高さは別として、日本の山々に軍配をあげて、ドイツ人を大いに羨しがらせました。夢にみるほど、温泉と森の山を、ベタベタ雪の山を想い出した次第です。

夏休みはシャモニーとイタリアに過ごしました。シャモニーでは

JACの会員近藤等、岡村崔の両先輩に会い、ガストン・レビュッア、フリゾン・ロッシュにも紹介され、よい想出になりました。登山はもっぱら春以来の仲間モリツと一緒に、不自由なフランス語を使い、けんかしながらみたいいな山登りでしたが、それでもモン・ブランを始め、グラン・シャルモからグレボンへのトラヴァース、ル・モアンの北々東稜と南稜などをやりました。最後にはモリツ、岡村氏と三人で、ドリユに十六ミリカメラを運び上げ、映画をとりながら登りました。結局三人連れと映画のため、ビヴァークを余儀なくされましたが、岩壁にぶらさがって星をながめ、目の黒々としたグラント・ジョラスの北壁や、月に光るモン・ブランの峰々の雪を眺めていると、感激に寒さも忘れるほどでした。

八月十八日シャモニーをあとにジュネーブからシンプロンを越して、イタリアの美術行脚を二週間、小さな町々のひとつひとつが、美術館や博物館のよう、さすがイタリアとおもいました。

まだ行きたい山は多く、ワリスやドロミテもおもいますが、どうなるかわかりません。

(一九六二年九月三日、巴里にて) 藤島敏男

大隅半島の東海岸

古沢 肇

大隅の佐多へは、薩摩の山川港から渡る。台風の名残で波が荒い。鯨の歯の如き半島の先きに船はひかう。二十三日、伊坐敷からバスで大泊へ、大泊から岬まで歩いて、観光道路が八分完成でいて、そこをくく歩いてむやみに暑いのは閉口して。岬には鉄筋の展望台が立って人を集めていた。

大泊の小さな宿は遊覧客でいっぱいだった。

大泊をはなれ外ノ浦へ静かな峠路にかかるとやと旅らしくなつた。外ノ浦から間泊、竹ノ浦、古里、郡と歩きつづけて汗を流した。浜尻から辺塚へ舟があると聞いて、当てにならぬ舟待ちで半日無駄をした。二十五日陸路迂回して辺塚へ出た。大隅の東海岸で一番静けの思いがしたのここだった。平家の落人の村、墓石には平氏何某などと刻んである。

ここから終日、種子島を見ながら搬材道を歩いて大泊に出た。稲尾岳というのが海まで迫っていて景色がいい。

大泊にもいろいろ話があるが省略する。とにかく海にのぞんでいながら小舟の一艘もないというさびしいところだ。

大泊から部落の背後に聳える峠越をして、内之浦辺塚に出て、ようやくトラックの古厄介になり、岸良からバスで内之浦町にと出た。

暑熱と蚊と蠅、フィラリヤ、貧しい家々、そういうものからすべて逃れて、目の前に拡るおだやかな内之浦湾の白砂青松は、もはや平凡の一語につきた。(三七、八)

研究委員会の一部の委員と懇談した結果、海外登山審議会委員、ヒマラヤ経験者、常務理事等とも懇談を重ね、現在のヒマラヤ委員会はヒマルチュリ登山後の任務も完了したので解散し、新しい構想の下に委員会を設置し計画を進めたいとの意見の一致をみた。仍て委員の選定について会長、副会長日高、横氏に一任したところ、左記の六氏に新しく委員をお願いすることに決定をした。

ヒマラヤ委員会委員
三田幸夫、加藤泰安、辰沼広吉、村木潤次郎、今西寿雄、梶本徳次郎 以上五名。

⑩海外登山審議会報告
・明年度海外登山の計画は現在のところ、大阪市大(ランタンリルン)、同志社大(サイバル)、東京農大(ルンバスンバヒマール)などの計画がある。

十月理事会

四日・ルーム

▽松方会長、三田副会長、理事折井、山崎、辰沼、川上、中島、金坂、村木、田村、木下、徳久、高橋、古沢、監事野口、松本、石原東京支部長、東京支部若佐。

▽議事と報告

①第十七回国体について(折井)
・本会から渡辺副会長が出席する

②イタリアフィルムK2試写会について(折井)
・朝日新聞、JAC共催で公開試写会を行う。場所東京、大阪。

③関西支部規約改正について(〃)
・改正事項、支部の地域を明確にした。

(改正地域)大阪、京都、兵庫、滋賀、奈良、和歌山、及び岡山、広島、香川、愛媛、徳島、高知の各府県。

④旧会員の復活について(折井)
・静岡県支部の訪台について(〃)
・明年一月出発、期間一ヶ月。

⑤名譽会員について(折井)
・東京支部主催、氷雪技術講習会について(折井)
・十二月一日、富士山にて開催、講師は技術委員会に依頼。

⑧山日記について(折井)
・十二月中旬発売予定通り進行中

⑨登山技術指導者講習会の完了について(金坂)
・登山技術研究委員会より関係諸事項完了したとの報告あり。

⑩山岳診療所の利用状況について(田村)
・診療の範囲が拡がり、山岳とは関係のない症状の外来も増加した。各診療所間の診療分担区域について、今後検討の必要あり。

⑪年次晩餐会について(折井)
・日時 十一月二十八日(水)

・会場 茗溪会館 以上。

東京支部報告

六月十二日(火)臨時役員会

六月十三日山岳映画と講演会の最終打合せ、準備。

出席 折井、安彦、中、芳野、三枝、錦織、野萩、山口、関口、富田

六月十八日(月)臨時役員会

1 越後支部齊藤氏より飯豊山山開き及団体コースの説明
2 夏山相談所開設の件

高島屋より依頼あるも辞退す

3 六月十三日映画会の反省

出席 折井、安彦、坂倉、西川、岩佐、三枝、篠原、関口、鈴木

野萩、山口、富田

七月四日(水)役員会

1 六月十三日映画会会計報告

2 七月第三水例会のビールパーティ懇親会の件について

3 八月二十二日ヨードルの夕べについて

4 飯豊山山行の件

5 百瀬慎太郎遺稿集「山を想えば」近刊予告の件

6 富士山清掃の件

7 スキースクール開催の件

8 十一月講習会の件

9 宮城支部と交歓懇親山行の件

10 上高地山荘利用の件

出席 折井、安彦、坂倉、中、錦

織、関口、野萩、鈴木、芳野、

山口、宇田川、富田

八月一日(水)役員会

1 八月二十二日のヨードルの夕べについて

2 八月第三水例会取止めの件

3 山荘改築、ルーム移転の募金の件について

4 九月第三水例会の件

5 ネクタイ留売上利益報告

出席 折井、安彦、坂倉、三枝、中島、関口、篠原、岩佐、鈴木

山口、富田

九月五日(水)役員会

1 九月第三水例会の件

2 支部行会会計の扱いについて

3 懇親山行計画について

出席 石原支部長、坂倉、中、篠

原、野萩、鈴木、三枝、山口、

富田、芳野、芳野、西川、関口

十月三日(水)役員会

1 十二月初めの氷雪技術講習会について

2 十一月第三水行事について

3 懇親山行について

十月二十七日八日北八ヶ岳

出席 折井、安彦、芳野、宇田川

中、坂倉、三枝、岩佐、関口、

錦織、野萩、鈴木、山口、富田

○ ○ ○

第1回氷雪技術講習会

日時 12月1日・2日

場所 富士山 五合目芙蓉荘宿泊

定員 三十名

費用 二、五〇〇円

係 芳野 杜夫

第二〇回小集

日時 年37月10日25日(水) 6時

◇会場 体協会議室

◇講演と映画

◇講師 全岳連登山隊々長高橋照氏

▽来会者氏名

・荻野和夫、安彦六郎、吉田 薫、山

本忠、永井浩一、山崎智弘、皆川孝

平、松永敏郎、降旗 孟、川崎隆章、

君島久登、中 保、田辺卓司、坂井

真、藤原武夫、横田敏一、柴田晴彦、

塚越雅則、山口国俊、石鍋孝夫、小沢

明夫、松田雄一、佐藤テル、折井健

一、藤島敏男、新堀春喜、岡村治信、

吉沢 一郎、豊田寿夫、大橋晋、山口節

子、増田洋子、神谷 恭、山果一雄、

渡辺嘉男、広谷光一郎、芳野起夫、芳

野菊子、千葉重美、牧野 衛、須田紀

子、今井嘉道、増本 茂、遠藤順一、

日高信六郎、関 勝、農大孤田 快、

早大岳友会山路洋護他二名、織内信

彦、海野治良、荒木正弘、松浦謙助、

山崎金次郎、隈部恵子、川上順子、斎

藤直一、遠藤隆三、土屋 満、練木允

雄、金子賢三、酒井忠夫、吉田 功、

富田美知子、岩佐吉雄、川森左智子、

建石八重、金坂一郎、以上六十七名

・隊長の高橋照氏は、中大OBである

が、戦前なく、「山人倶楽部」で苦勞を

積まれた人、貴族的でない所謂庶民性

が身についている。当夜の講演後の楽

しい質疑応答がそつだ。恐らくヒマラ

ヤが大家の間に根を下しつづつあるとい

う感激が誰の心にもあったろう。

「山岳」57年内容予告

・山岳十話 横 有恒

・コルディエラ・プランカと

アポロパンパ

・ブルー・アンデス

・P 29の西面

・ランタン・リルン

・ジュガール・ヒマール主峰

の直下まで

・マッキンレー登頂記

・マッキンレー登山

・西部カラコルム紀行

・錫岳源治郎尾根の由来と

当時の思い出

・登山技術指導者講習会

追悼欄

・山崎善雄氏(伊藤秀五郎、藤島敏男)、

ガルツェン・ノルブ(横有恒、松田

雄一)、森本嘉一氏(泉隆次郎)、大

島健司(橋本信行)

・ヒマラヤ登山年譜

○会務報告 英文梗概

写真四十葉 地図十葉 本文約二〇

〇頁 二月刊予定

○編集者 望月達夫

「山岳」編集者から

「山岳」57年は別記の内容を以て目

下組版中です。今回も本年一月に原稿

執筆の依頼状を送し、約半分は四月

末頃に集まり、大部分は八月下旬迄に

入手出来ましたが、一、二の原稿は十

月上旬ようやく届いた状態でした。そ

の間に催促を出した回数も少なからず

中には電報も含め二十回近く手紙を出

さされた向きもあり、また二年越しの

ものもあります。年度内の刊行を達成

方々のためにも、今後共出来るだけ早く原稿を送られることを願っております。

また「山岳」の内容についての私の考え方は、会報二一九号に書きました通りですが、海外の遠征記事ばかりを載せる方針と誤解されている方もあるやに想像されるので、そんなことは全くなく国内の山に関する記事も大いに歓迎致しますので、「山岳」に適したものは是非執筆されるよう、ここに改めて一言致しておきます。(十月十日) 望月 達夫

会 告

日本山岳会会長 松方 三郎

海外登山 日高信六郎

審議委員会委員長

昭和卅七年度国際スポーツ行事用外貨枠申請に関する件

近來、海外登山が盛に計画され、相ついで立派な成果があげられていることは誠に御慶の至りであります。而し、スポーツ用の外貨の制限は依然として存続し、一般の外貨情勢としても決して好転している訳ではありません。従いまして、日本山岳協会内において海外行事関係の業務を担当致すことになっております日本山岳会としては従前通りの方針で海外登山の計画を審議し、体協当局に申請する予定でありますので、例年の慣例により十月十五日迄にそれぞれ計画書を御提出下さるよう御願ひ致します。尚、必要書類は次記の通りであります。

1、登山計画書 各三部

2、必要外貨明細書 以上

昭和卅七年九月 会員 各位

大分支部報告

昭和三十七年度日本山岳会

大分支部定期総会

▽日時 六月二十三日

▽会場 大分市商工会館

▽議事

イ 36年度事業報告

ロ 36年度会計報告

ハ 支部規約一部改正について

ニ 37年度事業計画について

ホ 37年度予算について

ヘ その他

▽役員改選

三十七年度支部役員

支部長 永井清一 留任 (別府市)

副支部長 野口秋人 " (")

常任理事 利満成功 " (大分市)

理事(会計) 木本善重 " (別府市)

理事 橋本富夫 新任 (大分市)

理事 中川隆輔 " (別府市)

監事 三谷忠一 留任 (")

顧問 工藤元平 留任 (久住町)

顧問 加藤数功 " (大分市)

▽支部規約一部改正(案)

日本山岳会大分支部細則

第一条 会費は年二〇〇円とする

とあるのを

第一条 会費は年三〇〇円とする

に改める。

▽昭和36年度事業報告

十一月四日

昭和36年度定期総会 (於久住町)

赤川荘)

十一月五日

久住登山 (南登山口) 全員参加

十二月四日一六日

祖母傾山縦走 (小田、利満)

十二月十五日

役員会 (ガルツェン遭難援助資金カンパ)

十二月二十一日

溝口岳人顧問の葬儀参列

昭和三十七年一月二日

久住遭難救助隊参加 (小田、利満)

一月二十二日

久住遭難者追悼会及び反省会参加

二月十日

役員会 (本部会費及び入会金引上げについて)

三月五日 役員会

三月十二、十六日

由布、祖母、傾登山 (深田評議員来県につき加藤顧問が案内)

▽昭和37年度事業計画

1 講演会

2 親睦登山会

3 交歓登山会 (福岡支部、熊本支部と連絡の上実施)

4 研究、体験発表会

5 組織拡充対策、遭難防止対策

6 自然愛護運動の推進

7 山の美化運動の指導

お願い

会あてのご通信、ご連絡には会員番号をお忘れなくお書き添え下さるようお願いいたします。



佐藤久一 朗画

ヒマラヤ登山隊に 望むもの

—ネパール在住の
一会員から—

神原 達

日本のヒマラヤ登山には残念ながら毎年なにかしら問題がある。その原因をつきつめれば、日本隊はまず外貨を政府から得るのに苦労し、それ故ネパール政府への登山許可申請、また装備の無税輸入許可の交渉がおくれることと、もう一つは英会話と社交がへたでつまらぬところで損をしていることだろう。

ネパール側では登山許可申請はブル・モンスーン期の遠征の場合、前年の十月頃には、ネパール外務省に書類がとどくようにしてほしい。といっている。これは同じ山に他国の登山隊が申請している場合も考えて、また装備の特別輸入に関する書類をインド政府とも連絡をとってカルカッタの税関に差し廻すのに日時がかかる関係からである。

外国隊はそれをほぼ実行している。しかし日本の場合、まず日本山岳会

の海外登山審議会という会を通らなければ、日本体育協会に割当てられたスポーツ外貨は使えない。その許可がはっきりしなければネパール政府に正式に登山申請はできないたてまえだが、たいがいの登山隊は体協の外貨割当て時期がおそいため日本国内の準備と同時にネパール政府あてに非公式に申請を行っている。というのも、それでも出発間際になるぐらい、日本国内の用意がおそいのである。それ故登山隊がカルカッタに到着しても、ネパール政府の装備の輸入に関する書類はニューデリーのネパール大使館かインド政府の大蔵省にあることになり、カルカッタ税関にはまわっていない。登山隊はあわててデリーの日本大使館あてにその促進方を依頼することになるのだが、デリーの大使館では登山隊が今少し早く書類を出してほしい、と要望している。

またネパール政府は今年から登山料を外貨払いですし、との方針を打ち出した。日本政府の許可もおりぬ内にカトマンズにいる邦人等で外貨の都合のつく人に頼み登山許可のみ申請していたのが今年の各隊の実状だが、これはおかしな話である。

日本山岳会での遠征許可は前年の七月頃には行い、その許可された正式な外貨で日本から銀行を通じネパール政府あてに正式に登山料を支払うようにしなければいけない。この点協議と接し、山岳会分だけで特別に早く決めてもらう様なことはできないものだろうか。

今年から登山法規が少し変り、装備食糧の点でネパール税関でひとめあった。装備等で下山後再び持ち帰るものはその物品の保証金を入国の時にデポジットし、食糧等の消費物資はネパール国内で使用されるのだから、帰国の時に正規の税額を課税するというのだ。日本隊はネパール外務省に交渉し特別許可を出してももらったが、ネパール側としても、その物品の明細等をはっきり定めたわけでなく、どこまで税金をおさめたらよいのかはつきりしない。これは新興国のある種の感情問題だろう。開国後十二年たったネパールも最近では国内の行政、法律等の整備に積極的だし、国内産業の育成にも少しづつ力を入れはじめているのである。

さる登山隊はカトマンズの税関でコーン・ビーフの缶詰とマッチを全て差押えられたが、インド、ネパールのヒンズー教団では牛は神聖視されているし、またマッチはネパールで、専売で例えばインド製でも外国産のマッチは一切国内販売を禁じられているのだ。半分ぐらい火のつかないネパールのマッチでは登山には役立たないが、ガス・ライターでも使えばよいのではなからうか。

この種のトラブルはいずれも登山隊の不幸といえよう。というよりネパールの現状に関する知識不足である。特に最近のネパールの変化は著しいものがある。私が前に一年間滞在した頃（六〇〜六一年）と比べ、例えば街の電気は明るくなったし、カトマンズの

電話はダイヤル式になったり、日に日に変っている。そのような新興国の現実をよく見定める眼がなければ、遠征隊の資格はない。特にこの国の特殊な政治状態、南のタライ地帯ではコングレスの政治家がテロ活動を行いまた中共、インドという両大国に挟まれた国際関係等も、登山隊は口には出さなくとも、常に心しておくべきである。

日本人でネパール・ヒマラヤに入っただけは一九五二年のマナスル踏査隊以降十年間に、かれこれ三百名近くなるだろう。また単なる観光でカトマンズを訪れる日本人も年々増えている。特に一昨年の皇太子御夫妻のネパール御訪問以来、特に多い。そして最近では両国の関係も登山に限らず、技術援助経済協力等と、更に密接になりつつある。私もカトマンズに来てからたった三ヶ月間に登山隊以外に三十名以上もの日本人がそれぞれの目的で来られた。電源開発とか、日本政府から贈られたレントゲン機械のすえつけの技師とか、またアジア生産性機構（A.P.O.）の会議が開かれ、その為にも多くの邦人が来られた。

スイスの技術援助者は一つの大まき場をもっていて、そこに登山隊も泊るし、またシェルバが常にサバントやコックとして使われていて、登山隊が本国から来た場合、彼らが参加するからヒマラヤン・ソサエティとのトラブルもそれほどない。いわば良いシェルバを子がいにしているわけだ。日本人のたまわり場ができて、その空室は常に日本からの技術援助者や

ネパール政府登山規則 を一部改正

本件の概要については会報二二二号にU.P.I.電をもってお知らせしましたが、その後、八月二十三日付情文第一四五八号を以て外務省より左記の通り口上書により正式に通知がありましたのでお知らせ致します。

記
The Embassy of Japan,
New Delhi.

July 29, 1962.

The Ministry of Foreign Affairs present their compliments to the Embassy of Japan and with reference to Paras XVI and XVII of the Terms and Conditions for Carrying out Mountaineering Expeditions in Nepal have the honour to state that by an Order of His Majesty's Government dated July 24, 1962, the maximum rate of customs duty leviable on the Expedition goods has been fixed at 10 per cent a. v. except on liquors and cigarettes. By the same Order, parties required to deposit cash on account of the goods meant for reexportation are allowed to deposit cheque instead.

FOREIGN MINISTRY

ネパール外務省は今般同国の登山遠征隊に関する規則の中、第十六条及び第十七条の一部を一九六二年七月二十四日付改正した。即ち、遠征隊が同国に持ちこむ用具の課税額は今迄不明確であったが、この点について酒・煙草を除き十%程度に固定した。

又従来各遠征隊は再輸出する持込用具には、現金にて課税額を供託する必要があったが、これも小切手にすませることができる様になった。

(Y.M.)

また登山者に正当な料金で提供されるようになれば、ばか高いホテル代を払う必要もなく、またある登山隊の如くこちらが訪れるのにも気がひけるような薄き安ホテルに泊る必要もないだろう。例えばカーストの階級社会の厳しいネパールでは、そのような安ホテルに泊る日本人は日本のスイーパー階層（掃除人）とみられるし、またそこを訪れる時にはネパール人の知人に見られぬようこちらも気をつけねばならない。カトマンズのホテル代は中級ホテルでも一泊五〇ルピー（約二四〇〇円）と大変高くなってしまったが、もしこのたまり場（日本人クラブと仮名しよう）ができれば空家を借りてシニルバに食事を作らせている登山隊もそこに泊ればよい。日本山岳会あたりでカトマンズにクラブ・ハウスを作れば理想的だが、技術援助関係者でこのクラブ設立は案外早く実現するかもしれない。

クラブ設立の青写真を少し示すと、まず大きな家に食堂、個室。集金室等を完備させ、金網が窓ごとに入り（フイリヤ蚊を入れぬため）ガレージには荷物の積める箱型の車が一台と、そして井戸と水の大型濾過器は何よりも必要だ。カトマンズの生水は煮沸し濾過しなければ飲めないのだ。電気はここ数年大変明るくなったし、家具もネパールで良いものができる。日本食、その他の必要物資は、このクラブをアメリカ等の援助ミッションと同等とネパール政府から認めてもらえば、無税で入る。ざっと考えてもこのようなプランが浮ぶが、何とか実現させたいものだ。登山装備も何回も使えるものはそのクラブにキープすればよい。

しかし現在の登山隊は、日本を出る前にはカトマンズにいる邦人またニューデリーやカルカッタの在外公館、商社、新聞特派員に色々現地での仕事を頼むが、帰国するとさっぱり音ざたがなくなってしまう。またネパール・ヒマラヤの最近の情勢が次に続く登山隊に伝わらない。横の連絡が悪く毎年登山隊は同じようなトラブルをおこしたりしているのは、おかしい話だ。

それよりもカトマンズ在住の邦人が最も心配な点は遭難した場合のことである。今年の各隊の場合少くとも私あてに山から連絡のあった隊は、ジュンガール隊一隊のみで、他の隊はいったいどうしているのか、さっぱり分らなかった。ネパール人の新聞記者が時々登山隊のリニゾン・オフィサーから政府あての連絡を私に伝えてくれるのが唯一のニュース源である。しかしもし遭難でもおこった場合に大使館からの要請で真先に動かねばならないのは我々なのである。

今後の登山隊にはそれ故次のことを希望する。遠征隊の時々の様子をかならずポスト・ランナーに託しカトマンズにいる邦人あてに連絡してほしい。そうすれば私どもでも現状がはっきりし、いざという時に動きやすい。

次にもし遭難等のあった場合、その隊が資金的にどれほど余裕があるかにもよるが、ヘリコプターか小型飛行機が使える点である。参考までに記すと

ヘリコプターはカトマンズにあるアメリカのさる電気会社のもので、一時間四十七ドルで使える。高処用の強力なもので、カトマンズからエヴェレスト山麓まで一時間半もあれば行ける。小型飛行機は六〇年のスイスのダウラギリ隊が使ったビレタスポーターで、一時間百ドルでチャーターできる。重傷者はそれで直ちにカトマンズの近代的な病院に運ば、長いキヤバンの必要もない。各隊とも少くともチャーター代ぐらいの予備金は用意してきてほしい。

日本隊の社交は少しずつよくなっていくようだが、それでも外国隊に比べはじめである。日本もマナスルの初期の頃はまだネパールの実状がかいもく分らなかつたに於ては、カトマンズの上層支配階層の人々とよく社交にふれたいものだった。しかしその後小遠征隊が入りだすと、彼らはカトマンズは一日も早く退散することのみ専念し、在留邦人のせつかく切り開いたネパール人との友好関係などもまったくおかまいなしに、いわば知らない者の強味で私どもから見たら気が気ではないことをへいきでする。

外国の遠征隊は一流ホテルか、又金の余裕のそれほどもない隊は自国の大使館員等の邸宅にやっかいになり、ともかくゆうゆうとカトマンズに於ける事務と社交をやっている。日本隊は三流ホテルで南京虫にくわれ、世話になつたネパール側要人をお礼の食事等と呼ぶことも多い。その隊の性格と資金によるが、概してはじめである。また英語に自信がなく、知りつつつい気おくれしてしまうのだから、ネパールとて小さいながら一國をなし、カトマンズはその国の首府で都会なのであり、またネパール人はなかなか自負心が強いということをもきこみにめいじておくべきであろう。

カルカッタにはヒマラヤン・クラブという戦前から名高いヒマラヤ登山者のクラブがある。私もロバート大佐の推薦で一昨年会員になったが、日本人は現在、私一人だけと聞きびっくりした。同クラブ刊行の有名な雑誌「ヒマラヤン・ジャーナル」は日本人のヒマラヤ登山者もさんざん御やつかいになっているが、今まで多くの登山者が来てどうして同クラブに入会しなかつたのだろう。日本隊も帰りがけにはカルカッタのクラブにてカラー・スライドでも見せて自分たちの登山を少しは国際的に知らせ社交にこころがけねばうそだろう。ヒマラヤン・ジャーナルの「ヒマラヤン・ニュース」という欄には毎年のヒマラヤ登山隊が記されているが、日本人の名前等間違ひだらけである。日本のヒマラヤ登山隊の活動をまとめた英文の報告書でも一冊出なければいけない状態だ。

ともかく、日本のヒマラヤ隊は以上の如く様々な問題があるが、外国隊でもおそらく自国内では色々なことがあるのだから、それは分らないだけなのかもしれない。私などの若輩が、このようなことを云うのは僥越かもしれないが、山岳界の諸氏の善処を希望する。（三七・七・三〇）

計報

藤原文雄氏 本会会員藤原文雄氏は、八月二十日午後十一時三十五分、心筋梗塞にて急逝された。享年五十才。藤原氏は一九五八年一月入会。（会員番号四六二四）。同氏は共同通信社運動部次長の要職にあり、マナスル以来海外登山の迅速正確なる報道に努力され、本会のために尽された。前号ネパール登山規則追補記事は奇しくも遺稿となった。こゝに謹んで哀悼の意を表します。葬儀は二十二日午後自宅で行はれたが、本会から松方会長、榎、成瀬、古市、金坂松田、宮下が参列した。

編集後記

☆一年ぶりでカットをとりかえました。茨木さんの絵は、小野幸氏の提供によるもので、未発表の作です。☆会報の編集には毎号多くの方々からご支援をいただいておりますが、前号と今号は特に松田雄一、山崎安治の両氏を煩わしました。記して感謝の意を表します。

昭和三十七年十月二十五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六
発行所 社団法人 日本山岳会

編集者 古 沢 肇

頒価二十円 電話神田(四)八九五二番
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂